

論文博士

論文審査及び最終試験の結果

学位申請者	長谷部 茂
申請学位 (研究分野)	論文博士 (安全保障)
論文題目	中国文化のイスラーム受容に関する研究－主に比較思想の視点から
成績	論文審査及び最終試験
	合格

平成28年2月24日

拓殖大学学長 殿

審査員主査 森 伸生



審査員 渡辺 利夫



審査員 富坂 聡



審査員 杜 進



審査員 名越 健郎



審査員



学位申請日	平成27年10月 8日
受理審査会	平成28年 1月24日 可決
論文審査	平成28年 1月25日 から 平成28年 2月5日まで
最終試験	平成28年2月6日

(注) 論文審査及び最終試験の成績は「合格」「不合格」の評語で記入すること。

平成 28 年 2 月 24 日

拓殖大学大学院  
国際協力学研究科  
委員長 梶原弘和 教授

学位論文審査報告書

申請学位： 博士（安全保障）  
学位申請者： 長谷部茂  
所属： 拓殖大学日本文化研究所付属近代研究センター主任研究  
員兼創立百年史編纂室編集委員  
論文題目： 「中国文化のイスラーム受容に関する研究—主に比較思想  
の視点から」  
英文題目： “A Study on the Acceptance of Islam in Chinese Culture  
Mainly from the Viewpoint of Comparative Thought”  
審査委員会 森 伸生（主査：イスラーム研究所教授）  
渡辺利夫（副査：学事顧問）  
富坂 聡（副査：海外事情研究所教授）  
杜 進（副査：国際学部教授）  
名越健郎（副査：海外事情研究所教授）

I. 論文の要旨

上記の学位申請論文は、中国イスラームが 1350 年間にわたり、存続してきた主たる要因として、回儒（儒教と教養をもつイスラーム学者）思想に表れたイスラームと儒教の親和性を手がかりに、儒教がイスラームを受容した結果であることを論証したものである。

論証方法として、主に五つの論点を検証している。第一論点として中国イスラームの歴史的形成と地域的拡大を可能にしたイスラームの特性を検証した。第二論点として回儒たちがイスラームと儒教の親和性を発見した経緯を回儒の哲学と礼の面から検証した。第三論点として、儒教体系をイスラーム的方法による構成が可能であることを検証した。第四論点として、新儒学（朱子学）と陽明学がイスラームの影響を受けていることを検証した。

第五論点として、中国の文化の特殊性を明らかにしてイスラームを受け入れる素地があったことを検証した。

それぞれの論点で申請者の独創的発想が表れているが、特に、申請者は、イスラームと儒教に親和性があると受け取られたのは、すでに儒教がイスラームを受け入れていたからであると今までにない見解を展開し、その証明に新儒教（朱子学）における論理性をあげた点である。朱子学の後に王陽明が出てくるが、王陽明は「良知」の概念を「天神合一」として、まさにイスラームのスーフィー（神秘主義者）の理念を適応していると申請者は指摘する。さらに、中国文化論についても注目すべき論点である。イスラームを受け入れた中国について、中国の中国たる所以は文化にあるとし、それは常に最新の文化を受け入れることであるとした。その真意は最先端のものを取り入れるだけでなく、常にそれを追い越し、自らその担い手となることをめざしている思想、文化である。ゆえに、朱子学として集大成された新儒学は、当時において最先端の文化であったイスラームを取り入れて、儒教の革新をはかった、と論証した。中国の文化に対する独自性の高い新たな文化論である。

## II. 論文の構成

本論文は 章から構成されている。以下に、本論文の目次を示す。

### 【目次】

#### 序章

第一節 本論の目的

第二節 本論の経緯

第三節 本論の主題に関わる先行研究

#### 第一章 イスラームの生命力と中国への浸透

第一節 イスラーム拡大の五つのファクターと中国

イスラームの中国伝来——唐代

海洋貿易の隆盛——宋代

ムスリムの大量移民——元代

第二節 隠された宗教ファクター——イスラームの影響を受けた新儒学

イスラームから中国への思想的影響

明武帝のイスラーム評

中国ムスリムは儒教をどう見たか—『経学系伝譜』から

回儒・劉智『天方至誠実録』に見る親和性の「発見」

イスラームに包摂された儒教体系——四統源流図説

朱子学の逸脱

王陽明の「良知」とイスラーム

## 第二章 回族の形成と発展

### 第一節 回族の歴史

#### 回族の形成

「大分散、小集中」——明代

ムスリムの受難と革新——清代

ウェスタン・インパクトと回族の近代化——近代

民俗か宗教か——現代

### 第二節 回族社会の諸相

イスラーム海洋貿易の継承者たち——福建省泉州

儒教の聖地におけるイスラーム——山東省済南

海洋・東南アジアに開かれた内陸イスラーム——雲南省昆明・納古鎮

海峡を渡った回族——台湾

## 第三章 イスラームと儒教の親和性——回儒思想の解明

### 第一節 回儒とは何か

#### 第二節 イスラーム思想の概観と変遷

神学、哲学とスーフイズム

ギリシャ～インド思想の融合と集大成

#### 第三節 儒教思想の概観と変遷

尊尊親親賢賢の意味

儒教思想の変遷

儒教は宗教か

孔子の神学——如在観

#### 第四節 回儒思想——哲学の側面から

神学と哲学の分節点——ガザーリーの思想

イスラーム神秘主義の源泉——イブン・アラビー

儒教思想に一貫するもの——天、命、性

王岱輿の三一論——イスラーム・儒教思想比較の枠組み

三一論を儒者はどう見たか

劉智の理解したイブン・アラビー——『天方性理』

回儒はなぜ「来世」を語らなかつたのか

#### 第五節 回儒思想——シャリーアと礼の側面から

シャリーアを解説した劉智『天方典礼』

儒教の礼とは何か

儒者との対話——金天柱『清真积義』

#### 第六節 田中逸平のイスラーム入信と五教（回・儒・道・仏・基督）帰一

田中逸平の思想遍歴とイスラーム

- イスラームをふまえた儒教批判と管仲学
- 儒教経学の新解釈
- 第七節 現代の回と儒
- 第四章 中国の外来文化受容と中国文化の特性
  - 第一節 中国とは何か
  - 第二節 中国文化とは何か
  - 第三節 中国で消滅した外来文化
- 第五章 イスラーム・中国文化比較
  - 第一節 イスラーム文化の源流
  - 第二節 中国文化の中に隠されたイスラーム
    - 「客」から「主」へ——歴史的考察
    - 中国の興亡を知り尽くした回族の知恵——社会的考察
    - 儒教の中核部分に入り込んだイスラーム——思想的考察
    - 親和性がもたらしたもの——文化的考察
    - 古道恢弘
    - 道徳共同体
  - 第三節 イスラーム・中国文化と現代
    - 『文明の衝突』の衝撃
    - 文化の重層構造
    - 回族の直面する問題
- 第六章 残された課題——イスラームを介した世界文化探求の試み
  - 第一節 梁漱溟の三大文化論
  - 第二節 田中逸平の文化論
  - 第三節 イスラームと日本文化
- I 初出論文・報告書一覧
- II 文献一覧

### III. 論文の概要

論文の概要を章別に示せば、以下の通りである。

序章では、申請者は本論文の目的と論点を明らかにするとともに、問題意識の概要を説明して、続いて比較思想の視点から行う、現地調査を含む研究と分析の方法を解説している。特に中国人による先行研究に対する評価と本研究の位置づけを明らかにした。

第1章では、イスラームの生命力の源泉を、西暦七世紀、アラビア半島に生まれたイスラームが、わずか数世紀の間に、周辺世界に拡大し、世界を席卷するに至った五つのファ

クター——宗教、貿易、軍事、文芸、移民——ととらえ、イスラームの影響が、中国の文化、社会に広く及んでいたことを示した。中国史から見れば、唐、宋、元から明代の前半（七～一五世紀）の時期に当たる。

中国史で漢民族王朝が復活した明代の後半以降においては、イスラームからの直接的な影響は跡を絶ち、中国におけるイスラーム・ファクターは、中国領内に定着したムスリム（回族）に限定されていく。特に、その時期の始まりを象徴する明末清初の回儒（儒教の教養をもつイスラーム学者）のイスラーム經典漢訳事業を取り上げて、宗教のファクター（イスラームの儒教への影響）を証明した。

第2章では、回族の形成と発展の歴史と、中国各地の回族社会の実情を明らかにした。

中国におけるイスラーム存続の最大の理由は、イスラームそのものの生命力にあると指摘し、イスラームの中国への影響を、イスラーム拡大の5つのファクター（宗教、貿易、軍事、文芸、移民）から検証した。唯一宗教ファクターは、これまで、イスラームから中国へというベクトルでの影響が、ほとんど無視されてきたが、申請者は、回儒思想の分析を通じて、新儒学と称される宋代の朱子学や明代の陽明学が、イスラーム思想の影響を受け、それまでの儒教を変質させて、新たな思想を形成したことを論証した。

中国におけるイスラーム拡大の形態について、5つのファクターの相乗作用によってイスラームは、教義を普及させて信徒を増やすのではなく、信仰を一つにする社会そのものが広がっていくという外来宗教の新たな形として、波状的に中国全土に拡大していったことを明らかにした。

中国イスラーム社会の諸相では、中国各地に点在する回族社会の現状を、福建省泉州、山東省済南、雲南省及び台湾について現地調査を踏まえて分析し、各地の特長を次のように示した。

泉州では、大半の回族がはるか昔にイスラームの信仰を失っているが、イスラームは家譜に示された先祖の教えとしての意味をもっていた。雲南ムスリムはモンゴルとともに雲南を征服した屯田兵の後裔である。開拓者としての矜持をもち、ムスリムが多数を占める地方郷鎮も各地に点在する。

台湾へのイスラーム伝来は明朝末期、鄭成功の時代である。大半は対岸福建省から移民したすでに信仰を失った回族であった。現在のムスリムは1940年代後半から、台湾に移民した国民党軍のムスリム兵士とその子孫である。イスラームを宗教と見るか民族と見るかという国共内戦以来の問題が持ち込まれ、近年の民主化、アイデンティティの形成と絡んで、複雑な様相を呈している。宗教か民族かの問題は、台湾ばかりではなく、中国では統計上の「回族」の定義にも、矛盾したまま据え置かれていると指摘し、回族の将来が危ぶまれると危惧している。

第3章では、イスラームと儒教の親和性を明らかにし、回儒思想を解明している。

イスラームから新儒学（朱子学、陽明学）への影響に思い至ることがなかった回儒にとって、イスラームと儒教の親和性は一つの大きな発見であり、驚きであったことを指摘して、回儒は、さらにイスラームと儒教を歴史的に（あるいは原理的に）遡って、儒教の源流である「礼」と、イスラームの信仰と共同体の規範であるシャリーアを同一同根と見なすようになったことを論証した。

その結果、回儒の変化を次のように表現した。回儒は確信をもって、イスラームと儒教が相反しないばかりか、ムスリムにとって儒教の理解を深めることがそのままイスラームの信仰を強固にするものだと信じた。彼らはむしろイスラームに儒教を取り込み、儒教が2000年を経て失ったものをイスラームが継承していると考え、儒教をイスラーム信仰の下に統べる壮大な体系を構築した。回儒の体系は、中国という非イスラーム国家においてムスリム（回族）が、実際には漢民族の風俗習慣を取り入れながらも、心中に矛盾や動揺を感じることなく、自らムスリムでありつづけることを保証するものであり、共同体の維持にとっては尚更に望ましいものであった。

回儒の思想をイスラームそのものとして理解し、受け継いだ拓殖大学一期生・田中逸平は、イスラームの視点から儒教全体を俯瞰し、更にそれを押し広げ、儒教ばかりか神道、仏教、道教、キリスト教についても、同様の姿勢で一貫する「五教帰一」を主張するに至る。

第4章では、中国の外来文化受容と中国文化の特性を明らかにした。

イスラーム・中国間の歴史の奔流には、偶然的要素も含めてイスラームを中国に根付かせるいくつかの出来事はあったが、それを受入れ、その継続を許し、イスラームを受容してきた受け皿としての中国自身のあり方も、イスラームの存続を可能にした理由の一つであることを論証した。

さらに独特の中国文化論を次のように示した。

中国の中国たる所以は文化であり、その文化は、時々の世界の趨勢を見据えて、最良最新の異文化を取り入れ、それを凌駕し、自らその担い手となることで不断に発展する。中華とはすなわち、世界で最も優れた文化を指す。漢民族の文化ではない。唐～元王朝の時代において、イスラームは世界に冠たる最先端文化を誇っていた。イスラーム文化の中国への影響は、すでにその多くが中国文化の中に融合されて、見分けがつかなくなっているといっている。

第5章では、イスラームと中国文化の比較を通して、両者の親和性を検証した。

申請者はイスラーム・ファクターの中国浸透の歴史、回族社会の形成、回儒思想に見られたイスラームと儒教の親和性から、イスラームと中国文化の間には、次のような共通性があることを見出した。

1. 過不足のない十全の文化であること。人類文化のすべてを網羅、継承していると信

じられている。

2. 過去の歴史において理想を実現した文化であること。したがって過去を振り返り、復興しようとする文化である。

3. 共同体（イスラームの場合はウンマ、儒教の場合は宗族）維持のための文化であること。つまり文化の成員たる人と社会のための文化である。

これらの共通性は、中国におけるイスラームの存続と漢民族との共存に、一定の役割を果たしたことを指摘した。

しかし以上の諸点は、あくまで儒教を主流文化とする中国との比較であることを明らかにして、中国イスラームの次のような課題を示した。

中国イスラームにとって儒教との親和性は、新たに構築されつつある中国文化の中では、あまり積極的な意義をもたない。新たな環境の中で、今後、中国イスラームはどのような対応をとるのか、課題は大きい。

さらに、現在の回族の研究者の言葉を紹介している。

回族・張承志は、回族の命運を「三つの喪失」という言葉で表現した。第一が故郷の喪失（唐代以降）、第二が言語の喪失（明代以降）、そして第三が信仰の喪失である。仮借ない宗教弾圧であった文化大革命さえ乗り越えた回族が、1980年代以降、改革開放による経済偏重の生活の中で、信仰を失いつつあると、張は警告している。

第6章では、「残された課題」として、本論の検討から啓発され、派生したイスラームと文化をめぐる諸問題を提起した。イスラームを度外視した梁漱溟「世界三大文化論」と、その対極にあるイスラームを中心に据えて展開した田中逸平の中国文化論を紹介する中で、イスラームと日本文化を検討した。そこで、中国、西洋、日本の異文化の受容、文化の重層構造について論じ、現実の問題としての中国とイスラーム圏との交流や宗教・民族問題について申請者独自の見解を提示した。その一つとして、次のように他民族国家について論じている。

多民族国家というのは、多くの民族が集まって国を形成したという意味ではない。歴史的に見れば、多民族でなかった国、地域はないのである。今もって多民族国家であるということは、それぞれ個別の民族が個別のままに存続しているという意味であり、一面ではそれら多民族が一民族に統合されずに、今あるということで、また一面ではそれらを許容するか、許容せざるを得ない事情があるということである。要は、異文化に寛容であったか、または無関心で、同化されることなく来たということである。

この独自の見解を基に、筆者は次のようにまとめている。

イスラームが中国で一三五〇年にわたり、浮島のような共同体の中で信仰を維持しながら存続するようなことは、やはり日本では起こりえないと、驚嘆を禁じ得ないのである。そして日本人が中国イスラームのように、その文化を維持しながら外国で存続することも同じように起こりえないと確信するのである。



#### IV. 審査委員会結論

##### 1 審査所見

上記の学位申請論文は、中国イスラームが1350年間にわたり、度重なる王朝の交替と圧倒的な漢民族の影響の下で、その信仰と共同体をいかに守り、存続させてきたかの理由を、回儒（儒教と教養をもつイスラーム学者）思想に表れたイスラームと儒教の親和性を手がかりに、イスラームのもつ生命力と中国文化のもつ外来文化受容性の観点から解明しようとするものである。

従来中国のイスラームに関する研究では、イスラームが中国に受け入れられるために中国化したと考えられていた。しかし、回儒たちは、イスラームと儒教が似通っていることや、親和性があることに気づき、その親和性を哲学と礼を使って解明し、その結果、儒教とイスラームが同根であると主張した。彼らにとって儒教を深めることはイスラームを深めることであり、儒教を受け入れることがイスラームの信仰と矛盾するとは考えなかった。これを中国化とは呼べないと、長谷部申請者は指摘する。

拓殖大学の一期生である田中逸平は回儒に影響を受けムスリムになった稀有な人物であるが、彼はイスラームを儒教と同根とする考えをさらに展開させ、五教（回・儒・道・仏・基督）帰一を主張した。さらに、イスラームのシャリーア（イスラーム法）と儒教の礼を同質と捉え、シャリーアがイスラームに継続していることに照らして儒教を考え、儒教の根本である周公の創始した礼に本来備わっていた宗教的な要素は孔子の時代においてすでに途絶えていたが、管仲の治世においては継承されていたとして、儒教の継承における管仲の重要性を説いた。回儒から展開されているこれらの考えはイスラームと儒教の親和性を基にしている。つまり、儒教が失った十全性をイスラームが実現していると考えたのである。

長谷部申請者は、イスラームと儒教に親和性があると受け取られたのは、すでに儒教がイスラームを受け入れていたからであると今までにない見解を展開し、その証明に新儒教（朱子学）における論理性をあげている。朱子学は儒教に形而上学を持ち込み、体系的な宇宙論を構築して、それを修養の階梯と結合させ、さらに、失われていた儒教の礼を復興させ、実行のレベルまで具体化して民衆に示した。それはムスリムとその思想との接触により啓発されたことによるものであると長谷部申請者は考え、そのことについて検証し、論理立てている。朱子学の後に王陽明が出てくるが、王陽明は「良知」の概念を「天神合一」として、まさにイスラームのスーフィー（神秘主義者）の理念を適応していると長谷部申請者は指摘する。

さらに、イスラームを受け入れた中国について、中国の中国たる所以は文化にあるとし、それは常に最新の文化を受け入れることであるとした。その真意は最先端のものを取り入れるだけでなく、常にそれを追い越し、自らその担い手となることをめざしている思想、文化である。朱子学として集大成された新儒学は、当時において最先端の文化であったイ

スラームを取り入れて、儒教の革新をはかった。一方、イスラーム側も中国側の誤解を避けるために、あえて儒者には理解できず、また重要でもなかった創生・来世思想を表面には出してこなかった、と論じている。中国の文化に対する独自性の高い新たな文化論である。

さいごに、中国イスラームの将来性について論じている。現代の中国イスラームにとって過去において強調された儒教との親和性は、新たに構築されつつある未来の中国文化の中では、あまり積極的な意義をもたなくなっている。今後、中国イスラームは中国文化を構成する伝統文化の一つとしての立場を守るのか、或いは外来宗教の一つとしてイスラーム圏との連携を図るのか、または信仰の有無を問わず少数民族として優遇され、豊かになるとともに多くの棄教者を生んでいる現状を受け入れていくのか。中国イスラームは現在、中国での存亡をかけた大きな選択を迫られている、と中国におけるイスラームの文化的なあり方に危惧を示している。

申請者は、中国では外来宗教が消えていく中でイスラームが生き残ってきた要因の一つに、イスラームの儒教への影響がある、という大胆な説を打ち立てているが、それはまだ推論の域を出ない部分もある。しかし、本学位申請論文はイスラームと儒教を研究対象として、文明の融合という新たな視点を切り開くのに重要かつ挑戦的な論文であり、学術的な独創性の高い研究成果として評価される。

## 2 審査委員会結論

学位論文審査委員会は、事前に提出された学位論文申請書、学位論文要旨、学位申請者略歴等をもとに、数回の会合を重ね厳重な審査を行った。最終的には、平成28年2月6日の口頭試験およびその後の審査委員会で審査委員全員一致で学位申請者に対し、提出論文が「博士（安全保障）」の学位授与に値するものであることを認めた。